様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　21　年　5　月　7　日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2009
課題番号：18320005
研究課題名（和文）知識・行為・制度をめぐる「因果性」と「志向性」の哲学的解明

研究課題名（英文）Philosophical Investigations into Causality and Intentionality on Knowledge, Action, and Institution

研究代表者
氏名：一ノ瀬正樹
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：20232407

研究分野：哲学
科研費の分科・細目：哲学・倫理学
キーワード：知識、行為、制度、因果性、志向性、目的、理由、正当化

１．研究計画の概要

本研究「知識・行為・制度をめぐる「因果性」と「志向性」の哲学的解明」は、「因果性と「志向性」という、生成に関する伝統的な二つの原理について、知識や認識に関わる理論的側面、行為や自由・責任につながる実践的側面、そして制度や規範・法に関わる社会的側面の、三つのアスペクトからアプローチしていき、そのことによって説明、理解、合理化、正当化、というおよそ人間の活動であるならいかなる場面にも当てはまる普遍的な事態の構造を解明し、多様な学問領域の橋渡しをするという哲学固有の課題をはたしていこうと目論むものである。最終的には三つのアスペクトそれぞれを通じて応用倫理的な問題場面への原理的・哲学的提言へとつなげていくことを目的とする。

２．研究の進捗状況

現在まで、研究代表者および研究分担者はそれぞれの関心から、この因果性と志向性の対比の問題への研究を進め、いくつかの著作、論文、そして口頭発表の形で成果を世に問うてきた。研究代表者の著書『原因と理由の迷宮』や、研究分担者・高山の哲学会での講演「因果の対称性と理由律」などは、本研究の課題にダイレクトに関わるテーマに向かった成果である。

また、志向性や目的性という面の研究に関しては、自由意志論ならびに責任論という形での研究の見るべき展開があった。研究代表者の世界哲学会議での口頭発表「vagueness of free will」はそうした成果の一つである。

加えて、研究分担者・松永によって、食や健康という諸問題系についてのユニークな成果も挙がった。食や健康は、人間の身体の因果的メカニズムを踏まえながら、それと相即する心理的な流れ、つまりは意志や意図という志向的作用の介在する現象という文脈の中で考察すべき主題であり、本研究課題の重要な問題領域である。

さらに、以上のような進捗に沿った形で、応用倫理的・実践哲学的な研究の進展もおおいにあった。研究代表者の一連の、「触法精神障害者」についての講演や論文がその目に見える成果である。

３．現在までの達成度

上記「研究の進捗状況」にあるように、本研究課題の研究達成度はかなり高いと判断される。もともと因果性と志向性・目的性というのは、古代からの哲学の根本問題であり、いかなるものであれ、それが生成するときの二大原理である。それゆえ、今日においても、この主題は依然として哲学の大問題であり続け、さまざまな観点から検討が試みられ続けている。私たちの研究課題は、こうした大問題に対して、ささやかながらも、因果性と志向性という対比そのものを主題として掲げ、しかも認識論的な問題設定のみならず、行為や制度という実践的アスペクトに焦点を当てた、ユニークな問題設定のもとで研究を遂行してきた。問題そのものの広大さからして、完全性はもとより望むべくもないが、因果性と確率の関わり、自由意志の程度説など、見過ごされがちな側面に光を当てて、かなり有意義な成果を達成してきたと自己判断している。

４．今後の研究の推進方策

本研究課題は、研究期間として、残すところあと一年たらずとなった。最後の一年の最大の目標は、研究成果報告書をまとめ上げることである。有意義な報告書となるよう、十分に準備して臨みたい。もちろん、それぞれのメンバーの単独の論文発表、講演・口頭発表などは、できるかぎり積極的に積み上げていきたい。

５．代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

①Masaki Ichinose. "Wittgenstein and Meaning as Cause: A Philosophically 'Uncertain' Investigation". *Philosophical Studies* 27: 1-8. 2009. 査読なし。

②Tetsuya Sakakibara. „Struktur und Genesis der Fremderfahrung bei Edmund Husserl“. *Husserl Studies* 24.1:1-14. 2008. 査読あり。

③松永澄夫　「脱自然化する食と農の真似事」、『環境思想・教育研究』第 2 号、pp.3-7. 査読なし。

④天野正幸　「実現不可能な理想国家と実現可能な理想国家」、『論集』第 26 号、pp.21-37. 2008.　査読なし。

⑤門脇俊介　「徳(virtue)をめぐって----ハイデガーとマクダウェル」、『思想』1011 号、pp.97-109. 2008. 査読なし。

⑥吉田聡　「他者と唯一性―フッサールにおける他者問題の諸層」、『現象学年報』第 25 号、掲載決定、2009. 査読あり。

〔学会発表〕（計　3　件）

①Masaki Ichinose. "Vagueness of Free Will". *The XXII World Congress of Philosophy,* 31 July 2008, Seoul National University, Seoul, Korea

②Masaki Ichinose. "Uncertainties over Medical Diagnoses of Mentally Disordered Offenders".*2008 Carnegie Uehiro Oxford Conference* 11 December 2008, St Cross College, The University of Oxford, UK

③ Izumi Suzuki “Philosophy of Non-Humanism: Deleuze and *Ritornello” The Third BESETO Conference of Philosophy*, 11 January 2009, Komaba Campus, The University of Tokyo.

〔図書〕（計　4　件）

①一ノ瀬正樹　『原因と理由の迷宮―「なぜならば」の哲学―』、勁草書房、2006 年

②松永澄夫（編）　『環境――文化と政策（編著）』、東信堂、2008 年

③門脇俊介　『現代哲学の戦略』、岩波書店、2007 年

④Mamoru Takayama (共著). *Prognosen über Bewegungen*. Books Verlag Berlin. 2009. 刊行決定

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕

特になし